

あとがき～第5回という節目に

節目となる第5回「社会鍼灸学研究会」が開催された。年内には実現しなかったが、皆様のお力添えで初めて年度内に論文集を発行することができた。2011年は、鍼灸に関する全国的な初法令である「鍼術灸術取締規則」が1911年に制定されて百周年となる。「社会鍼灸学研究 2010 第5号」はこの記念すべき時にふさわしい内容になっていると思う。

第5回は「日本鍼灸の存在意義を探る～いま、改めて日本鍼灸を問う～」として二日間の研究会が遂行された。第一日目は、若手研究者による研究発表が行われ、大学院のゼミスタイルでディスカッションがなされた。基礎や臨床という医学的な観点とは別に、人文科学的な鍼灸研究に対してじっくり討議されたことは非常に意義深い。

二日目は例年の形式で進められた。形井氏が世界情勢をふまえて、今、日本鍼灸の置かれている状況が口上され、続いて小野氏が伝統医学に関わる4つの国際機関と条約、ISO, WHO, UNESCO, 生物多様性条約(CBD)の概略と鍼灸とCBDとの関わりについて解説した。

前全日本鍼灸学会会長の矢野忠氏の「現代における日本鍼灸の存在意義」は節目にふさわしい講演であった。形井氏から常々、矢野氏が鍼灸の社会学的な研究の必要性を説いていたことを聞かされていた。本講演以前、明治国際医療大学誌(2009 創刊号)で「鍼灸医療の国際化と統合医療に向けて」として日本鍼灸の位置や方向性が矢野氏より明快に示唆されている。さらに本講演においては、第4回でお招きした佐藤純一氏の鍼灸に対する見解に対するヴィジョンや研究の方向性が示されており、研究会としての連続性としても繋がりができた。

記念すべき研究会と論文集にもっと言及したいのだが、世界史上の事実、今の科学やこれまで蓄積されたデータでは予想不可能な自然現象、東北・関東大震災が起きてしまった。

そのとき、私はサービス中であった。職員室から同僚とともに転がるようにグラウンドへ避難し、経験したことのない揺れに驚愕した。まだ学校に残っていた生徒や帰宅間際のものゝ所在を掌握することに追われた。電車通学の生徒と通勤職員は帰宅難民になり、あはきの実習室や臨床室が避難所となった。

使い尽くされた言葉ではどうも表現できない事態である。希望を失い涙も枯れてしまった方々に対して「がんばれ」などと言えない。ただただ、心からのお悔やみと困難の克服を祈ることしか私にはできない。

人間および人間が創造したものをいとも簡単に破壊する自然現象、その副作用としての原発事故は、まだ予断を許さぬ状況が続いている。放射能という見えない恐怖と不安が、当面続くと思うと大変心が重い。

地球はかつて地殻変動を繰り返し、現在の地図が出来た。人類史上では激しい地殻変動や大陸移動の起きる可能性が低いと、ある程度科学的に説明が付くのもかもしれない。しかし、私は単純に、フィクションで見るような人知不能な現象がいつ起きても決して不思議ではないと思っていた。まさに、起きた。

今後、空白であった東京を中心にした首都圏大震災が発生する可能性は否定できない。贅沢にエネルギーを使い、これほどの便利と快適を享受してきた日本文明・社会は、これを機会に生活や価値観の大転換を考えてみてはどうだろう。欲を言えばこの転換期に鍼灸の価値が向上すればいいのだが。

またか・・・本文をしたためている最中も、茨城県沖を震源とする少し大きな余震がおきている。この惨禍はいつまでつづくのだろう。第6回の開催時には、事態が好転していることを切に望む。

社会鍼灸学研究会 箕輪 政博